

# 死刑はアジアの文化って本当？

## 死刑は「文化」ですらない

### 死刑について考えてみませんか

東京拘置所のそばで死刑について考える会（そばの会）

死刑廃止条約（市民的及び政治的権利に関する国際規約の第二選択議定書）が国連で採択されたのは1989年12月15日でした。その頃、世界の死刑廃止国は80カ国（存置国は96カ国）でした。

それから20年後の今日、廃止国は139カ国に増加し、存置国は58カ国となっています。こうした状況のもと、日本での死刑廃止を求める様々な催しが、相次いで開催されてきました。

★★★

その一つ、「東アジア死刑廃止大会」全体会のシンポジウム（12月13日／於・青山学院大学）では「『死刑はアジアの文化だ』って本当ですか？」と題して、ミステリー作家の島田荘司さん、江戸文化研究者の田中優子さんの対談や、死刑の執行が止まっている韓国や台湾からの報告がありました。

今でもアジアでは死刑を存置している国が多く、また、EUからの批判に対して、日本の歴代の法務大臣たちが「死刑は日本の文化です」と答えてきたことなどから、このテーマが取り上げられたのでした。

★★★

日本の場合、もともと古代より死刑を回避しようとしてきた社会であったものが、武力優先の時代となって死刑が積極的に用いられるようになったこと、切腹とか仇討ちといったサムライ階級の伝統的価値なるものは日本の社会と歴史全体から見れば例外的なものであること、敗戦で平和憲法を選択した際に死刑は廃止されてよかったのに、平和憲法を掲げながら戦争の準備をしている日本の矛盾の象徴のように、死刑が今も強化されている問題などが指摘されました。

そして、「死刑はアジアの文化ではない！」「死刑は日本の文化でもない！」「死刑は『文化』ですらない！」ということが、ゲストから次々と語られ、それでも「文化」と言いたいならば、それは「克服されるべき文化」だと訴えられました。

★★★

死刑の執行を停止している韓国（1997年12月の執行が最後）や台湾（2005年12月の執行が最後）でも、死刑制度自体は残っていて、いつ執行が再開されるか、あるいは、法的にも死刑制度を廃止できるのかは予断を許さない状況だそうです。しかし、いずれの国も執行停止前と比べて凶悪な犯罪の発生率が増えたということもなく、どのゲストも、世界は死刑廃止の趨勢にあり、遅かれ早かれ死刑は無くなっていくだろうことへの確信は揺るぎないものがありました。

中国政府の高官でさえ、将来的には死刑は廃止されるべきものと考えているという報告もありました。（今はまだその時期には至っていないという認識なのだそうです。）

★★★

もはや、世界的には、死刑の是非というよりも、いかに速やかに死刑制度の廃止を実現するかが問われている時代に入っているのかもしれない。